

## クチキコオロギの淡路島内新分布

山 崎 博 道

福良湾の目の前の海上に、おわんを臥せたように浮ぶ小さな煙島だが、その島へ渡ってみると原始の姿そのもののようなうっそうとした森である。この島に極めて珍しいクチキコオロギ（昔はオオコバネコオロギと呼んでいた）が生息していることは幼少の頃から知っていて、時々父といっしょに渡って採集したり、写真撮影をしたりしていたことを思い出す。

このコオロギは我国最大のコオロギで、体は扁平で、頭は大きく、触角は長い。そのくせ翅は短く、全体的にみてアンバランスな感じを受け、何か原始的なイメージを受ける昆虫である。

全国的には、東京湾を北限とし太平洋側を和歌山、高知、宮崎と局地的にとびとびに分布するもので、しかも最初の発見地が、この煙島であった。もちろん淡路ではこの煙島以外にはいないと長いこと信じこまれていた。

しかるに43年ぶりに、竹田俊道（旧姓＝山崎）氏の詳しい調査が開始されだしてから、三熊山、先山、淳仁天皇御陵と、煙島と似た環境に生息していることが次々と発見された。そしてこのコオロギは淡路ではそれほど珍しいものではなくなり、個体数もかなりいることが分ってきた。

淡路島におけるクチキコオロギの分布地を発見順に記すと次のようである（図1参照）。

- ① 煙島（1930, 9, 21）
- ② 三熊山（1973, 10, 11）
- ③ 先山（1973, 10, 11）
- ④ 淳仁天皇御陵（1973, 10, 22）
- ⑤ 沼島（1974, 11, 16）少数
- ⑥ 灘大川（1974, 11, 16）
- ⑦ 柏原山頂上の神社前（1975, 9, 24）少数
- ⑧ 春日神社（1975, 10, 3）
- ⑨ 諭鶴羽山頂上（1978, 7, 15）幼虫1頭のみ
- ⑩ 竹原ダム（1978, 9, 27）
- ⑪ 成相ダム（1980, 11, 1）
- ⑫ 高倉山（1980, 11, 2）

①は山崎千里氏、②～⑧・⑪は竹田氏、⑩・⑫の竹原ダムと高倉山は著者の発見になる。①～⑪はすべて淡路中南部に位置し、⑫の高倉山のみは津名町大町で、それらからやや離れて淡路北部に位置し、これが今のところ淡路では新しく北限として記録されるものである。

今日の竹原ダムと高倉山の発見のいきさつは次のようである。

### 竹原ダム

1978年5月28日、県及び兵庫野鳥の会主催の探鳥会が初めて淡路で行われ、その探鳥地がこの竹原ダムであった。その時はダムの中を泳ぐシカ1頭を見、エナガの古巣をあとで小林桂助会長が詳しい説明をした。これが著者の初めての訪れであったが、小林会長は冬鳥の好観察地になろうと言っておられた。

2度目に訪れたのはそれから4ヶ月後の9月27日のことであった。ダムまで車で行き、そこから頂上まで歩いて登った。

探鳥が目的で入山したのであるが、全く予想していないクチキコオロギのあの特徴あるギィー、という声が、ダムから殆んど頂上まで至る所で聞えるのである。頂上部は竹藪になっていたり、杉の植林などされているので全くいないのはいうまでもないが、結局行き帰り計2頭の姿を認めた。

なお、竹原ダムの頂上は柏原山であることを注記しておく。

### 高倉山 (265 m)

この山のふもとを通る県道竹谷五色三原線、鮎原境寄りの大町に「高倉神社」と書いた大きな石碑が道路沿いに立っていて、よく目立ち、安産守護の神をまつてあるという。

ここを通る度に1度登ってみなければと思っていた。やっと、初めて登ったのが、1980年11月2日である。

県道から入って、車で行けるところまで行くと最後の人家の所で駐車した。なんとその人家の藪の所からすでに盛んにクチキコオロギの声が聞かれ、頂上まで、至る所で声がしていた。ちょうど環境も竹原ダムと似ていて、どっちもたいした環境ではないのにもかかわらず生息数は多く、姿も確認した。

頂上は神をまつた建物があり、広場があるが、この広場には短い草がはえて草原みたいになった所がある。この草の中からマツムシに似た、しかもマツムシでないチン、チン、チンというはっきりした高い声で鳴く虫がいた。午後3時頃で服をぬいでいるとやや寒さを覚える

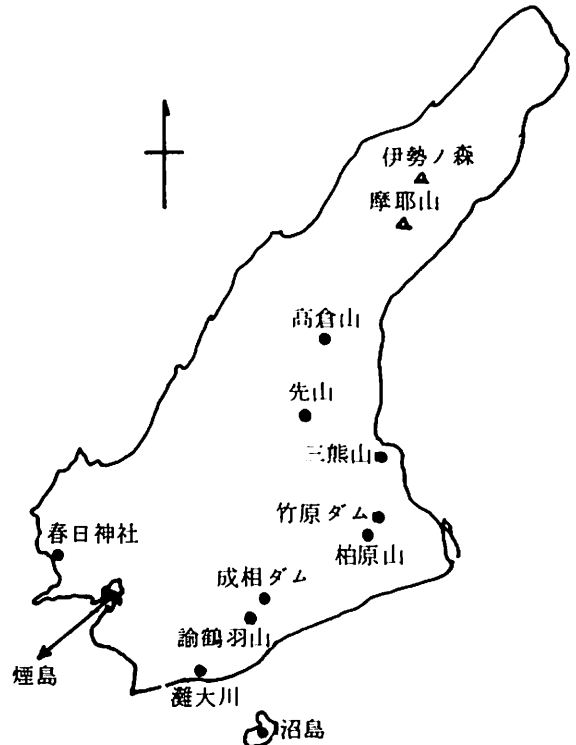


図1. クチキコオロギの淡路島内分布図 ●印分布地

温度である。しかしどうしても姿を見つけることができず無念のまま下山した。

9日後の11月11日、竹田氏と再訪し、同所でやはり声がしていたが、この時はキ、キ、キという声に変わり、声数も少なくなっていたが、竹田氏が虫を見つけて採集、やはりマツムシであることが判明した。温度が低くなると声が変わるといわれていたが、こんな声は初めてだと、竹田氏が言っていた。

高倉山のふもとから少し離れて、川上神社という小さな鎮守の森のような所がある。またこれとは少し離れて県道沿いに、ちょっとした林がある。前者には発見できなかったが、後者には少数ながら声がしており、いるものと思われる。

竹原ダムと高倉山はよく似た環境でクチキコオロギの生息数もよく似て共に多い。ただこの2つは、シイ、カシ等の巨木や大きな朽木はなく、うっそうともしておらず、ごく普通の山である。にもかかわらず沢山生息しているのである。

こうなってくると、局地的であることはもちろんだが、淡路北部を除いて中南部にごく普通に生息しているといっても過言ではない。煙島に最初に発見されてから43年振りにはじめて淡路各地にいたことが分った。それも発見困難なものならいざ知らず、大型で、特徴ある声を発するこの虫の発見が行なわれなかったのは不思議である。

淡路では生息地の分布が大体判明してきたが、淡路以外の兵庫県下でははたしてほんとうにいないのか。徳島はどうだろうという疑問がわいてくるのは当然だろう。和歌山県には生息していることが知られている。

一つは、直翅類の研究家が少ないということが最大の原因であろう。

新しい生息地の発見月日を見ると9月下旬から11月上旬の2ヶ月の間であることが分る。すなわち声をたよりにこの頃が最も発見し易い時期であるといえよう。

北淡町に淡路第3位の高い山、伊勢ノ森というのがある。この山頂に常隆寺がありその一隔はシイ、カシ等の大木があっけいかにクチキコオロギの生息していそうな所だが、竹田氏、登日氏、筆者らが再々調べてみたが、発見できなかった。したがって山頂にはいないのが本当だと思われるが、そのふもとは未調査である。竹原ダムや高倉山の例からみると、伊勢ノ森のふもともよく調べてみるとひょっとして生息しているかも知れない。今後の課題として、さらに新しい生息地の発見がなされることを期待したい。

#### 参考文献

- 大野正男, 1972, クチキコオロギの最初の発見者は誰か 昆虫と自然 7(5)  
辻 英明, 1951, 北伊豆のクチキコオロギについて 新昆虫 4(6)  
山崎俊道, 1973, クチキコオロギ淡路島の各地に産す PARNASSIUS (11)  
山崎俊道, 1975, 淡路島産バッタ類 PARNASSIUS (14)